

日本地質学会第122年学術大会（長野大会）における国際交流活動報告

国際交流担当理事 ウォリス・サイモン（名古屋大学）

少し遅くなってしまったが、本稿で、日本地質学会第122年学術大会（長野大会：2015年9月11日～13日）における国際交流活動を報告する。

長野大会において、日本地質学会と台湾地質学会の学術交流協定が締結された。台湾地質学会からは、会長の劉 瑩三（Ying-San Liou）博士（国立東華大学）、学会事務局長の王國龍（Kuo-Lung Wang）博士（中央研究院地球科学研究所）、それに国際交流担当の林 殿順（Andrew Tien-Shun Lin）博士（国立中央大学）の3名が来日し、メルパルク長野における学術交流協定締結式および懇親会に参加した（9月11日）。3名は学術大会にも出席され、林博士は国際シンポジウムで講演を行っていた。

長野大会では、「東アジアのテクトニクスと古地理」および「法地質学の進歩」という2つの国際シンポジウムを開催した。海外からの招待講演者は、前者が4名（イギリスから2名、タイおよび台湾から各1名）、法地質学が3名（イギリスから2名、アメリカから1名）であった。

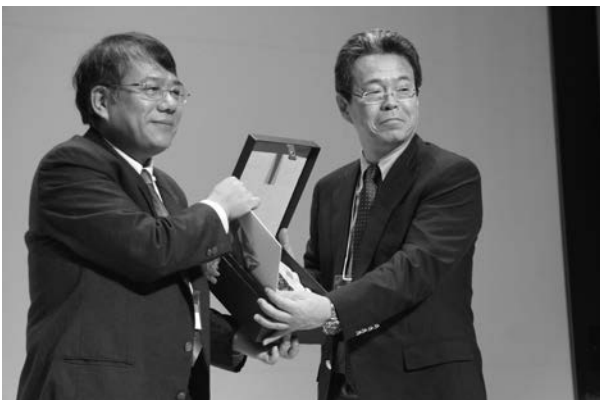
日本列島の誕生を語るためには、古生代の地質情報が必要不可欠である。しかしながら、当時の古地理についてまだ諸説があり、共通見解に至っていない。9月12日に開催された国際シンポジウム「東アジアのテクトニクスと古地理」は、国内および近隣国の古生代地質の専門家を招聘し、東アジアの地質構造発達史という大枠の中で、日本の基盤岩類の形成はどの位置づけるかについて話しあうために企画されたものである。本シンポジウムでは、特に古生物学情報から推定される古環境とジルコンなどの碎屑粒子のU-Th-Pb年代学という2つの手法に焦点を当てたが、両データ群を整合的に説明できる地質学的復元的重要性が実感された。本シンポジウムは日本古生物学会と共催で行われた。また、イギリスのMark Williams教授（レスター大学）が代表を務めるLeverhulme財団プロジェクト「Assembling the early Palaeozoic terranes of Japan」からも支援をいただいた。本シンポジウムでは、日本地質学会が学術交流協定を締結している学会との関係を生かして、日本の周辺の国から数多くの貴重な地質情報を入手でき、非常に有益なイベントであったと総括される。

9月13日に開催された国際シンポジウム「法地質学の進歩」では、わが国では未だに認知度が高いとは言えない法地質学の発展を目指して、事例を交えて法地質学のこれまでの成果と今

後の展望について情報共有が行われた。本シンポジウムは国際地球科学連合法地質学イニシアチブ（IUGS-IFG）との共催で行われ、海外からの招待研究者の来日費用の一部はIUGS-IFGにより援助された。IUGS-IFGは2011年の設立以来、世界各地でシンポジウムや教育活動を行ってきたが、アジア地域では初のシンポジウム開催であった。海外からの参加者と国内の法地質学研究者との交流も行われ、今後の日本における法地質学の発展のためにも大変有意義なイベントとなった。

学術大会最終日（9月13日）には、海外からの参加者を1日巡検に招待した。参加者は、林博士および同婦人、David Siveter教授（レスター大学）、Williams教授、地質学会からは会長の井龍、長野大会実行委員会事務局長の保柳、事務局の橋辺・細川が参加した。あいにく、当日は、国際シンポジウム「法地質学の進歩」の開催日であったため、同シンポジウムの参加者は、1日巡検には、参加できなかった。巡検では、まず、長野市立博物館戸隠地質化石博物館を訪問した。この博物館は、廃校になった長野市立柵小学校を丸ごと利用したもので、信州の自然史を解りやすく解説した展示が印象的であった。また、展示物の解説担当ボランティアの方々の解説と応答は非常に的確であった。貝形虫の専門家であるSiveter教授は、戸隠地域から新種として報告された貝形虫の展示と解説に御満悦であった。次に、戸隠神社を訪れた。同神社は、「奥社・中社・宝光社・九頭龍社・火之御子社の五社からなる、創建以来二千年余りに及ぶ歴史を刻む神社」（戸隠神社HPより）であり、多くの参拝客で賑わっていた。特に、Williams氏は神道と神社に関心を持たれたようで、日本人の宗教観について時間をかけて説明した。その後は、初秋の信州路の景観を楽しみつつ、善光寺前の精進料理の「淵之坊」へと異動した。「淵之坊」は宿坊で、昼食の時間帯には、宿泊客でなくても精進料理を味わえる。ここで、「法地質学の進歩」の参加者と合流して、精進料理を味わった。胡麻豆腐や蕎麦などが海外からの参加者に好評だった。また、玄関には「牛」をキャラクターにしたお土産などあり、海外からの参加者は「牛に引かれて善光寺参り」のいわれを興味をもって聞いていた。ここでの昼食をもって巡検の解散としたが、昼食後に善光寺を訪れた方が多かったようである。

このように、長野での学術大会では、2つの国際シンポジウムが開催され、大会期間中には台湾地質学会との学術交流協定を締結することができた。今後、国際交流をさらに活性化し、日本地質学会が東アジアの地質学をリードする存在となるよう活動を続けて行きたい。



写真左から、写真1) 日本地質学会と台湾地質学会の学術交流協定締結式。劉 瑩三台湾地質学会会長（左）と井龍康文日本地質学会会長（右）。写真2) 台湾から記念としてスワロフスキーがあしらわれた陶器の茶器（タンブラー）が贈られた